

# 2020 すいせん図書

## ～本の森へ～



西東京市図書館

# 1・2年生

## 「だれのこどももころさせない」

西郷南海子 文 浜田桂子 絵／かもがわ出版

せんそうをしない。せんそうをさせない。そのために、たくさんのひとがきめたことがあります。せんそうのりゆうをつくらないこと、せんそうのどうぐをつくらないこと。みなさんにも、せんそうをしないためにきめられることがきっとあります。



## 「ぼくはなきました」

くすのきしげのり さく 石井聖岳 え／東洋館出版社

5じかんめ、こんどのさんかんぴにはっぴょうするために「じぶんのいいところ」をカードにかくことになりました。ぼくは、みんなのいいところはたくさんおもいだせるのに、じぶんのいいところはかんがえてもみつきりません。ぼくにはいいところがないのかな、となみだがでそうになりました。じぶんのいいところにきづくお話です。



## 「プールのひは、おなきたいひ」

ヘウォン・ユン 作 ふしみみさを 訳／光村教育図書

わたし、プールのひは、おなかがいたくなる。さいしょは、プールにはいることができなかつた。こんどは、あしをバタバタすることができた。だんだんできることがふえてきた。にがてなプールがすきになってくるおはなしです。



## 「ぼくが見たお父さんの初めてのなみだ」

そうまこうへい 作 石川えりこ 絵／佼成出版社

ぼくの名前は、しみずゆうき。`勇気がある、のゆうき。ぼくのお父さんの口ぐせは、「男だろ、なくな！」。そういえばぼくは、お父さんのなみだを今まで一度も見ることがない。なんでなかないのか聞いてみたら、「大人だし、男だから」という。なんとなくもやもやして、お父さんが子どものときのことを聞いてみた。



## 「あらいぐまのせんたくもの」

大久保雨咲 作 相野谷由起 絵／童心社

おばあさんがコインランドリーでであったのは、一ぴきの子どものあらいぐま。「ぼくのハンカチも、いっしょにあらってほしいの」「『かなシミ』というシミがとれなくなったんだ…」というあらいぐまの目からは、いまにも、なみだがこぼれおちそうです。「よし、わかった」とおばあさんはせんたくきをまわしはじめました。



## 「きれいずきのマグスおばさん」

イーディス・サッチャー・ハード ぶん 小宮由 やく クレメント・ハード え／大日本図書

ある土よう日、スージーのいえにマグスおばさんがやってきました。おばさんはとてもきれいずきで、まず、スージーの顔や手をふき、ようぶくもきがえさせました。いっしょにどうぶつえんにいってもサルやシロクマがよごれていると、きになります。

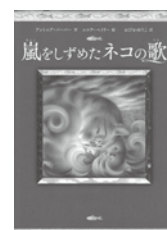
きれいずきなおばさんのたのしいお話です。



## 「嵐をしずめたネコの歌」

アントニア・バーバー 作 おびかゆうこ 訳 ニコラ・ベイリー 絵／徳間書店

ネコのモーザーは、漁師のトムとのんびりくらしていました。しかしある時、何日もつづく大嵐がおこります。たくさんの船がしずみ、畑はめちゃくちゃになり、人々の食べる物はなくなりました。人々のため命がけで漁に出ようとするトムに、モーザーはついていくことにしました。イギリスの古い伝説をもとにした物語です。



## 「もぐらはすごい」

アヤ井アキコ 著 川田伸一郎 監修／アリス館

みなさんは、もぐらを見たことがありますか？もぐらは一生のほとんどもりやはやし、こうえんなどのじめんのしたですごします。ちからもちで、おおぐい。でもまっくらなじめんのとんねるのなかで、どうやってたべものをさがすのでしょうか？

もぐらのふしぎを知って、あなたももぐらはかせになりませんか？



# 3・4年生

「**字のないはがき**」 向田邦子 原作 角田光代 文 西加奈子 絵／小学館  
そかいすることになったいもうとに、おとうさんははがきをたくさんわたして、げんきな日は、はがきに〇をかいてポストにいれるようにいいました。はじめは、〇がついたはがきごときました。でも、〇はだんだん小さくなってきたのです。  
戦争のかなしみと、その中でいきる家族のきもちをえがいた絵本です。



「**チェックおばあちゃんがくれたたいせつなつつみ**」 イ・チュニぶん キム・ドンソン え おおたけきよみ やく／福音館書店  
オギは教科書とおべんとうを、おばあちゃんがつつめてくれたチェックポ(風呂敷のような布)につつんで学校にかよいます。ともだちのダヒがかってもらった新品のかばんが、オギはうらやましくてたまりません。学校からのかえり道、ダヒにチェックポをからかわれ、ふたりはけんかをはじめます。おばあちゃんのまごころがつまった、色あざやかなチェックポが印象的な韓国の絵本です。



「**おれからもうひとりのほくへ**」 相川郁恵 作 佐藤真紀子 絵／岩崎書店  
待ちあわせの公園まで、自転車で向かう智の目の前にとつぜん1台の自転車が現れた。ぶつかる! でもつぎの瞬間、だれともぶつからなかった。ふしぎに思いながら公園に向かったが、だれもいない。翔平の家に行くと翔平とまさとがいたが、「やくそくなんてしていない」と言う。家に帰ると、母ちゃんもいつもとちがう。自分がどこかにもう一人いるのかも…と思うちょっとふしぎなお話です。



「**キセキのスパゲッティ**」 山本省三 作 十々夜 絵／フレーベル館  
ほくたちは、「夏フェス」で作るメニューを決めるため、パーベキューハウスに集まっていた。ほくは「うっかりスパゲッティ」、真奈は「かみなりスパゲッティ」、ジーナとユジユンは「カンタリアン」を提案。どのスパゲッティもあるきっかけでできた「キセキ」のメニューだ。そして、この3品に決定。夏休み終わりの日曜日、「夏フェス」が始まった。※物語に登場するスパゲッティのレシピつき。ぜひ、作ってみてください。



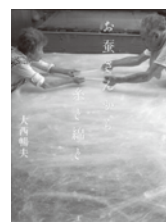
「**子ぶたのトリュフ**」 ヘレン・ピーターズ 文 もりうちすみこ 訳 エリー・スノードン 絵／さ・え・ら書房  
ジャスミンは、家畜の獣医をしているお母さんについていった近所の農場で、生まれたばかりの子ぶたたちに出会います。そのなかの一ぴきの子ぶたが死にそうなのを見つけたジャスミンは、家へつれて帰りトリュフという名前をつけて育てることにしました。元気に育ったトリュフのはじめてのクリスマスイブ、事件がおこります。りこうな子ぶたトリュフと、やさしい女の子ジャスミンのふれあいの物語です。



「**火曜日のごちそうはヒキガエル**」 ラッセル・E・エリクソン 作 佐藤涼子 訳 ローレンス・ディ・フィオリ 絵／評論社  
冬の夜のこと。地面の下では、小さなヒキガエルのきょうだい(ウォートンとモートン)が、土の中の家でデザートを食べていました。かぶと虫のさとうがしがあんまりおいしかったので、ウォートンは、おばさんとどけてあげたいと思い、うんとあたたかいかっこうで、スキーをはいてでかけることにしました。ところが、そのとちゅう、たちのわるいミミズクにつかまってしまったのです。



「**お蚕さんから糸と綿と**」 大西暢夫 著／アリス館  
着物や布団の材料になる「生糸」や「真綿」が、蚕という虫の繭から作られることを知っていますか? 糸や綿を作るには、蚕の命をもらわなければいけません。今では少なくなってしまった蚕から糸や綿を作る方法を見ると、糸や綿がたくさん命から生まれていることがよくわかります。蚕が「お蚕さん」と呼ばれ、大切にされているわけがわかるはずです。



「**「感じ」が伝わるふしぎな言葉-擬音語・擬態語ってなんだろう-**」 佐藤有紀 著／少年写真新聞社  
擬音語とは音をあらわす言葉で、たとえば「わんわん」や「にゃーにゃー」、擬態語とは人や生き物の様子や気持ちをあらわす言葉で、「わくわく」や「くよくよ」などです。日本語には、5千種類もの擬音語や擬態語があります。みなさんは、それらの言葉をどのように使いますか。自分らしさを表現できる言葉を選んで、「きらきら」「わくわく」過ごしてくださいね。



# 5・6年生

「**焼けあとのおにぎり**」  
うるしばらともよし 作 よしだるみ 絵／国土社  
六年生のキヨシは、東京から福島のおばあちゃんの家へ疎開していた。戦争が終わったが、両親からの連絡はない。キヨシはひとりで東京に行くことにした。おばあちゃんはタンスの奥にしまってあった大切な着物を農家でお米と取りかえ、五つのおにぎりを持たせてくれた。夜汽車にのってたどりついたわが家のあたりは、ガレキの山だった。終戦後の食べものがない時代のお話です。



「**走る図書館**が生まれた日-ミス・ティットコムとアメリカで最初の移動図書館車-」  
シャーリー・グレン 作 渋谷弘子 訳／評論社  
みなさんは、「走る図書館」をみたことがありますか？「走る図書館」を考えたのは、アメリカの司書（図書館で図書の保存・整理などをおこなう人。図書館員。）メアリー・レミスト・ティットコムでした。たくさんの本を車に積みこんで、広いアメリカじゅうを走り、図書館に来られない人たちにも、読書の喜びをとどけました。写真が豊富で、「移動図書館」のことがよくわかります。



「**アリババの猫がきいている**」  
新藤悦子 作 佐竹美保 絵／ポプラ社  
ペルシャ猫のシャイフは由緒ある長老族の血筋で、一族は故郷のイランではバザールの猫とよばれる縁起のいい猫です。シャイフは飼い主のアリババが仕事で日本をはなれる間、民芸品店（ひらげごま）にあずけられることになりました。店にある民芸品たちから身の上話をきくことに夢中になったシャイフは、バザールの猫のように彼らの願いをなんとかかなえてあげたいと思うのですが…。



「**はじめまして、茶道部！**」  
服部千春 作 小倉マユコ 絵／出版ワークス  
オレは、ナツメと一緒に理由があって茶道部に入部させられた。それは、ナツメの家の押し入れにお茶道具がかくすようにしまっておくこと、ふだん使っている名前はナツメだけど、戸籍上はお茶道具の「棗」であること、お母さんがおばあちゃんの事を教えてくれないことに疑問をもったナツメが、その秘密をさぐるためだ。「茶の心得」も、学ぶことができます。



「**もえぎ草子**」  
久保田香里 作 tono 画／くもん出版  
平安時代の京の都。萌黄は、今まで親がわりだった叔母と別れ、天皇の後のための役所である、職御曹司の下働きをすることになった。その別れぎわ萌黄は叔母から、父がつくったという紙を渡される。まっ白で厚みがあってきれいな父の紙、働いているなかで出会った色目を楽しむ薄様という紙、萌黄は、「紙」に興味をもっていく。清少納言も登場し、『枕草子』ができる過程もわかるお話です。



「**貸出禁止の本をすくえ！**」  
アラン・グラッツ 著 ないとうふみこ 訳／ほるぷ出版  
四年生のエイミー・アンは、内気でいいたいこともいえない女の子。家で妹たちのわがままに、がまんの毎日を過ごす彼女の楽しみは、図書室で本を読むことだ。ある日、彼女の大好きな本『クローディアの秘密』が、図書室から消えた。「子どもにふさわしくない本」として、貸出禁止にされてしまったのだ。大好きな本をすくうため、エイミー・アンは立ちあがる。みなさんの知っている本が、たくさん登場します。



「**うちの弟、どうしたらいい？**」  
エリナー・クライマー 作 小宮由 訳／岩波書店  
「弟をたのむわね」そう言って、ママはいなくなった。弟のめんどうを見るのは、あたしじゃなくてもいいはずでしょ？でも、弟が駅の自動販売機にいたずらをしたり、電車で石を投げたりしているのを知って、いつかたいへんなことになるんじゃないかって心配になる。弟はあたしが何を言っても聞かない。どうしたらいいかわからないあたしの悩みを聞いてくれたのは、弟の担任のストーパー先生だった。



「**マリモを守る。-若菜勇さんの研究-**」  
千葉望文 荒谷良一 写真／理論社  
絶滅の危機にある北海道阿寒湖のマリモを保護するために、研究者の若菜さんはやってきました。スキューバ・ダイビングの資格を取って自分で湖の調査をしたり、マリモのDNA鑑定をしたりして、科学的な証拠を集めます。マリモとたくさんの動物や植物、そして人が関わりあう、阿寒湖の秘密にせまる写真絵本です。

